

館山巡検

影 山 穂 波

8月9日、東京の朝は雨であったが、館山では雨を知らず、11時半、館山駅に巡検参加者が集合した。杉谷先生のもと、院生3人、2年生1人、翌日にはさらに3年生が1人加わったが、これまででない、少人数、かつ縦のつながりのある巡検である。館山駅前でレンタカーを借り、先生の運転で2日間回ることになる。

まず大房岬の多田良へと向かった。房総半島南部は、相模トラフに近い位置にあり、プレート境界に沿って発生した大地震に伴う地殻変動の累積により海成段丘が形成された地域である。巡検1日目は、この沼段丘と呼ばれる完新世海成段丘を、熊木洋太氏の分類図をもとに実際に歩いてみることを目的である。沼段丘は高位から沼Ⅰ～Ⅳ面に分類され、多田良では沼Ⅲ面以下を見ることが出来る。各段丘ごとに土地利用が明瞭であり、沼Ⅲ・Ⅲ'・Ⅲ''面では水田が開かれていた。その両側の高い砂丘面に家が立ち並ぶ。沼Ⅲ面はさらに海拔が高く、平坦で広さもあるためここも集落となっていた。次により内陸で沼Ⅰ・Ⅱ面を探した。分類図の示す場所へたどり着くことはなかなか困難で、Ⅱ面を見ることはできたものの、Ⅰ面を確認することはできなかった。途中でフェニックスや照葉樹林、房総竹などの植生を見て、温暖な気候を改めて感じた。

次にサンゴ化石があるとされる、滝川の河床へ向かった。既存文献の試料採取地点は川岸の植物に遮られていたので、より下流の、橋の脇から河原へ降りた。ここでは海棲の二枚貝化石が、ややしまった粘土層中に見られた。

午後は館山南部で天然記念物の沼サンゴ層（沼Ⅰ面）を見学した。縄文海進時にはリアス式海岸であったところが、今は海拔10数mにまで隆起している。大変期待していたのだが、柵に囲まれている上、草に覆われ十分に見ることもできず残念に思われた。

つぎに外房へ回って、フラワーラインを通り、

沼Ⅳ面に相当する白浜町野島崎にいった。ここの灯台から陸側に海成段丘が望めた。それぞれの段丘を通っていこうと、車を進めたのだが、道をまちがえたので、そのままフラワーラインを回って、宿泊場所である、館山のお茶大野外教育施設へ戻った。

翌日には、ゴルフ場の建設計画に反対して^{たちき}立木トラスト運動を展開している三芳村に向かった。この運動は、ゴルフ場建設予定地の地主の協力を得て、山林の木を支援者に売却し、その人のプレートを掛けるもので、92年8月5日現在で、3,094本総面積74,317㎡に達している。しかし、業者も計画変更で対応しているということである。実際、一度破壊された自然は元の形には戻らない。あまりにも安易な開発の実情を目にして、憤りさえ感じられる。

私たちは、運動の対象となっている地域を見た後、1時から三芳村農村環境改善センターで行われた交流集会に参加した。会場では、環境問題に関する書籍の他に、この地域で採れた無農薬野菜、またケーキやクッキーなどが売られていた。

集会ではまず立木トラストの現状が語られた。その後、藤かおる氏による「房総里山の民話のいろいろ」と題した民話を聞き、それから南修治氏によるコンサートが開かれた。彼は岐阜で初めて立木トラストを始めた人であり、彼の作った「山はだれのもの」をはじめとして、このコンサートには、強く訴えるものがあった。実際に運動を懸命に進めている人々の間に入って話を聞くなかで、集会を行うことで団結して運動を再認識している様子が理解されると同時に、その熱意が十分に伝わってきた。

今回の巡検は、2つの異なるテーマにそって行なわれたが、過去および現在の環境について考えさせられる内容であった。

(8月9～10日 杉谷教官指導)